

「みえの現場・すごいやんかトーク大学編」 in 県立看護大学の概要

9月30日（金）に三重県立看護大学で「みえの現場・すごいやんかトーク大学編」を開催しました。

当日は、「災害時に看護大生としてできること」というテーマで、東日本大震災のボランティア活動に参加した学生や、献血サークルに所属する学生、FM三重で学生パーソナリティをしている学生など12名の大学生と知事が意見交換を行いました。



（活動内容の紹介及び自己紹介）

最初に、知事から、ボランティアや日頃の活動を通じて、自分の目でみて、肌で感じたことを、そのまま教えていただきたい。そしてそれを是非いろいろな場面に生かしていきたい旨のあいさつがありました。

引き続き、参加者から自己紹介とともにそれぞれが行っている活動の紹介がありました。



トーク参加者及び活動内容について

○ ファシリテーター

成人看護学教授 玉田 章

● 東日本大震災被災者支援ボランティア活動「いわてGINGA-NETプロジェクト」参加者

4年	志賀	玲奈
	清水	光子
	中山	真璃奈
3年	清崎	彩伽
	三宅	優
	山下	ひかる
2年	杉浦	加奈
	市川	未奈
1年	横田	美乃里

東日本大震災被災者ボランティア活動「いわてGINGA-NETプロジェクト」に参加し、8月23～30日に岩手県内各地で活動を行いました。

● 献血サークル さくらんぼ

2年	柴山	祐香
1年	長谷川	有紗

鈴鹿市、松阪市内を中心に、月1回月例献血を行い、血液が不足していることを伝え、献血のための呼びかけ、広報などを行っています。

● FM三重 Campus CUBE

学生パーソナリティ
4年 藤田 美保

FM三重で放送中のラジオ番組で学生パーソナリティを務め、大学生の視点から、大学や地域の情報を発信しています。

（東日本大震災の被災地における活動から感じたことについて）

東日本大震災の被災地でのボランティア活動に参加した学生からは、現地の被災者からの話から仮設住宅でコミュニティを形成することの大切さを学んだという意見や、実際に被災者の中にも地域の人と交流したいという人もいれば、まだ心が癒えず、他人と関わりを持つという心の余裕がな

い人もいるので、ボランティア活動も、被災者のニーズに合った個別のきめ細かな対応が求められているといった意見がありました。

また、台風 12 号などの被害にあった紀和町にボランティアに行った学生からは、避難勧告が出たらすぐ逃げるよう、子どもたちだけでなく、大人に対する教育も必要であるという意見が出されました。

(災害時に看護学生としてできること)

日頃、看護という専門分野を学び、患者さんの立場に立つということを知っているということから、ボランティア活動を通じて、被災者の立場に立って、寄り添うという姿勢が大切なのではないかということを感じている意見が多くの学生から出されました。

実際に災害が起こった場合には、専門的な医療スタッフとしては、まだまだ未熟であっても、血圧を測ったりなど、日頃実習などで行っている行為などを避難所で行いながら、不安を取り除けるよう、看護の技術を生かして住民の心の声に耳を傾けるということができるのではないかという意見が出されました。

また、日頃献血活動のボランティアをしている学生からは、今回の東日本大震災の直後も急激に献血者数が増加したが、実は献血していただいた血液は、短いものだと 4 日程度しか保たない場合もあり、また、一度献血すると、献血者の健康を守るために、数ヶ月間期間をあける必要があることなどが紹介され、安定した献血体制が重要であるという意見が出されました。三重県では、献血を県として推進していく組織がないため、県単位で協力を呼びかける組織が必要との意見も出されました。

知事からは、献血の呼びかけは、他の団体なども取り組んでいるが、それぞれがバラバラに行っているため、これらをつなげて一緒にやってみることで、もっと効果をあげる活動につながるのではないかと、推進組織については、関係部局とも協議して考えていきたいという話があ

りました。

知事から大学生の皆さんへのメッセージ

最後に、知事から大学生の皆さんへお礼とともに、今後の活躍に期待し、次のようなメッセージが送られました。

- ・実際にボランティアに行ったから、日頃からいろいろな活動を行っているからこそその意見が今日は聞けたので、是非今後の県の施策に生かしていきたい。
- ・災害時には、まずは、自分の命、自分の周りの大切な人の命が守れるよう、心がけてほしい。その上で、今日たくさんいただいた看護学生としてできることを実践していただきたいし、引き続き、被災地への支援にもご協力いただきたい。

